

ミツバチと人間の ための環境保全活動 —キーストーン財団—

中村 純, 中村 佳子

バスがニルギリ高地への坂道を登り続け、峠を越え、ウーティ周辺にさしかかっただけで周囲に茶園が現れた。その背の低い緑のうねりや、日陰を作るために植えられているシルバーオークが何とも美しい景観を作りだしていた(図1)。人工的とはいえ、谷深い山間の土地には似合っていて、そこに秘められた不自然さはまだそのときは感じなかった。

クヌールに到着した私たちは、ホテルでキーストーン財団(Keystone Foundation)の創立者のひとり Pratim Roy 氏と第4回アジア養蜂研究協会ネパール大会以来4年ぶりに再会し、彼の案内で、歩いて10分ほどの彼らの直営ショップに連れて行かれた。看板はそれらしいものの、建物の陰になったショップは寂れた感じがしたが、開店以来であろう、15人もの外国人が実は翌日が引越しという最後を記念するかのよう大挙して訪れたことになった。ここでキーストーン財団の設立までの経緯や現在の活動内容などを聞き、皆の関心はすぐにショッピングに集中した。ここで売られているハチミツは、オオミツバチのものとトウヨウミツバチのものがあり、いずれも財団の関与する養蜂およびハニーハンティングの成果である。トウヨウミツバチ養蜂とオオミツバチのハニーハンティングは伝統的にこの地域で行われてきたが、その生産環境の悪化と、物流の不適正が財団の活動開始のきっかけでもあった。

「美しい茶園」の陰で

翌朝、バスでコタギリへ。そこでまずキーストーン財団の事務所をたずね、現在の事業や今後の発展計画などを聞き(図2)、さらに、蜂ろ



図1 見渡す限りの茶園風景は確かに美しくもある
シルバーオークは適度な木陰を作るため、横
に枝を広げてある

うやハチミツの加工場を見学した後、ハニーハンターのドキュメンタリービデオを見せてもらった。そこからジープ3台に分乗して、谷を下り、実際の養蜂普及の現場を見ることになった。そのジープの中で、同財団の Robert Leo 氏から昨日までは美しいと思っていた茶園への一種の「敵意」を感じさせる話を聞いた。

そこにはふたつの側面がある。茶園は、もちろんこれは他の農業に関しても同じことだが、もともとそこにあった植物相を根こそぎ破壊し、作られた人工環境であって、生態的に見れば異常な空間である。しかも、ひとつの茶園の成功が次々と茶園開発を誘い、ニルギリ高地は確かに茶の生産地としては有名になったかも知れないが、そこに息づいていた多様な生物相をかなり失ってしまった。動・植物ともに、インド亜大陸の南の高標高地帯ということで、地域固有種も多く、ある意味での生物の種のホット



図2 キーストンの完成模型を前に、
将来計画を語るロイ氏



図3 コタギリ近辺では痕跡程度だったサル林も
 小教部族の居住地にはまだ残っている

スポットでもあったという。道筋にわずかに残るサル林（図3）は南アジアの典型的植生でもあるが、これもほとんど失われたといって過言ではなかった。こうした生物学、生態学的な観点からも、生物の多様性を保全しようという姿勢がキーストーン財団に芽生えたのは当然のことと思える。

ただ、彼らの真の目的は決して人間生活の対岸としての自然の保護ではなかった。ここでおそらくより重要なのが第2の側面であろう。イギリスの植民地時代に栄えた茶園産業は、大きな企業の成功を招いた。大企業は次々と土地を買って茶園にし、国家もこれを援助してきた。しかし一方で、小規模な農民はどうであったか。すべての工程をまかなえる規模を持つ企業茶園と違い、最終工程まで自前ではできない。組合組織によって、共同で運営する加工場もあるらしいが、品質的に及ばない。そもそも大企業は茶の木の品種を頻繁に変えるらしいが、小農ではこれがままならない。このような状況で、結局土地を売り払う農民もでたという。

ニルギリの山中で不思議な印象を持ったのは、茶園以外の耕作地が少ないことであった。地域の食糧自給率は食べる人口に比例した耕作地があるかどうかでわかる。当然主食である穀類の畑が主体になり、野菜や果物がそれに続く。ウーティやクヌール、コタギリなどそれなりの人口を擁する地域にもかかわらず、気候的なこと、あるいは私たちの訪問時期もあって、マイソール近郊の低地にはたくさんあった

水田は山間地にはまったくなく、それ以外のいわゆる穀類畑もほとんど見あたらなかった。つまり、この高地はある時点から茶の栽培に向けた土地になり、茶が換金作物であることから、基本食料は貨幣との交換となり、食糧の自給率は低下したのだろう。ところが、その茶園を経営しているのは地元の住民ではないとしたら、この状況でどうやって生計が成り立っているのだろう。

地域開発事業や特定部族対象の開発事業では、インフラ整備や現金収入源の確保を通じて生活水準の向上が目される。ニルギリでは、もちろん茶園拡大事業も候補のひとつにはなり得ただろう。現在も、スリランカからのタミル系難民を茶園労働者として受け入れていて、政策的にもある種の評価を得ているにちがいない。ただ、それが果たして土着の少数部族の行く末をうまく望んでいる方向に導くものかどうか、遠隔操作のように事業を進める公的企業ではそうしたフィードバックは乏しい。特に茶のような原料系の換金作物の栽培普及では、やがて市場が成熟すると原料コストを下げる圧力が働きすぎて、いずれにしても生産地は苦境に追い込まれやすい。

「ミツバチの歌」が聞こえない

地域の開発を考えたときに、住民がどんな自然資源を利用しているかは重要な問題となる。人口が増えればその資源への負荷が大きくなり、また外圧によってそれらの資源が減少すれば、住民の生活に影響が出る。キーストーン財団の初期の調査もこの点を重視した。多くの少数部族が、伝統的にミツバチを飼い、またはニーハンティングをする文化を持っていた。その主要な資源は、ミツバチそのものと蜜源植物である。しかし農地での農薬の多用はミツバチを減少させ、開発による森林破壊は蜜源を減少させ、野生のミツバチの生活空間を消失させる。一方で、従来、儀式化され、宗教色の強かったハニーハンティングは、商業的傾向を強め、「ミツバチの歌（ハンティングに際して歌われていた）」などの無形文化財も消失傾向にあった。資



図4 バナナ園の中の少数部族の養蜂場

源保存としての重要な意味もあったハンティングに関する禁忌（ある崖の巣は残しておく、など）も忘れ去られつつあった。トウヨウミツバチ養蜂では、タミルナドゥで1991年にサックブルード病が発生し大きな打撃を受け、これに抵抗性のセイヨウミツバチの導入も始まり、土着ミツバチによる養蜂はその影響も被ることになった。こうしてハニーハンティングと養蜂を取り巻く環境は、生態学的にも経済的にも文化的にも大きく変化していた。

養蜂事業の展開

1994年にキーストーン財団の主要メンバーによって、タミルナドゥ州の各地の養蜂事情の調査が行われた（この結果は“Honeyhunters & Beekeepers of Tamil Nadu”という本になって2001年に刊行されている）。調査は、その後の養蜂普及事業の計画にも応用され、特に次の5つの事業計画に関わる項目が重点的に調べられている。

- 1 誰にでも理解でき、伝えやすい養蜂技術
- 2 臨機応変なフォローアップ態勢作り
- 3 現場の必要に応じたプログラムの設定
- 4 生産者にとって魅力的な生産物価格の設定
- 5 ハンティングや蜂場場所の選定基準の策定

全般的な環境の悪化は、前節で書いたとおりであるが、この調査を通じて、特に生産物の価格はある意味で問題だった。市場で売られるハチミツの末端価格は、伝統的な養蜂家の生産価格の3-6倍にもなっており、中間業者のマージンが大きい。逆に市場価値の高い蜂ろうはハニーハンティングする部族によってはまったく見



図5 巣板も小さいが蜂群自体も小さい

向きもされていなかったという。

こうした基本的な調査を経て、事業は始められた。ハニーハンティングの方がより計画路線に乗って進んでいるようで、私たちもこちらを見たかったのだが、車両の入れるところという選択肢には、オオミツバチのハンティングの可能なところはさすがになかった。時間的な問題もあり私たちはトウヨウミツバチ養蜂の普及地を見学するべくある村に向かった。村に着いた私たちが会ったのは、少数民族の養蜂家であった。斜面に立てられた家の前に、バナナに混じって巣箱がいくつか置かれていた。巣箱自体はトウヨウミツバチ用の小型のニュートン式巣箱である（図4、5）。別の一軒の近くにはコミュニティホールのような建物が設けられており、ここで行われた過去の研修や、養蜂技術、花粉媒介の重要性などが見てわかるように写真入りで掲示されていた（図6）。ここで養蜂家が飼っている蜂群はトウヨウミツバチとしては、まあまあ標準的なのだろうが、いずれも小さめの蜂群で、果たしてこれでどの程度の採蜜が可能か



図6 オオミツバチによる花粉媒介を開説したポスター。養蜂研修などの雰囲気が伝わってくる



図7 瓶詰めにしたハチミツを、裸電球の熱と乾燥剤で、若干の水分量調節を行う

は不確かだった。病気（タイサックブルード）の発生や、実際に他機関がこの地域で行った過去の事業の成り行きなども考えると、なかなか定着するまでには長い道のりが必要そうだった。

ただ、ビデオや施設を見学させてもらった限りでは、キーストン財団としてはやはり生産物に重点的に力を入れようとしている感じであった。養蜂家やハンターが持ち込むハチミツや蜂ろうの簡単な品質検査を行ったり、買い上げたものに関して、単純な加工（図7、8）をキーストン財団自体の設備で行っていて、これが件のショップなどで売られるわけである。普及事業として、かつては飼育技術の移転が偏重されるのが南アジアでは一般的だっただけに、時代は確かに変わってきたのかも知れないと思った。この方が確かに住民への動機づけもしやすい。キーストン財団の主要なメンバーが、養蜂技術を背景にこの事業を始めたのではないところが功を奏したともいえそうだ。

とはいえ、量的には心許ない生産物で、このままミツバチに関わっていくことが實際上、どのくらいこれらの少数部族の将来への助力となるのかは、意見の分かれるところだろう。彼らは現在もかなりの範囲で自給的生活をしている。そのなかであって、オオミツバチの巣を狩ったり、トウヨウミツバチを飼育したりすることは、彼らにとっては、長い伝統の技術であると同時に、古来外界との接点でもあり、また換金性の高い生産物の源であったことは間違いない。この営みを維持できる環境は、誰も気に



図8 得られた蜂ろうをいったんブロック状にする。これを再度融解して巣礎にも加工できる

とめないでいけば急速に変化してしまっただろう。キーストン財団の活動は、それに歯止めをかけ、なおかつ住民の生活水準の向上を犠牲にしないことを目指している。一般的に生物の多様性の単純な保護は、特に先進国や開発の進んでいる地域では、見かけ上、あるいは短期的には住民の生活をおある部分制限することもある。しかし、このケースでは住民の今の生活の維持、向上のために生物の多様性が守られねばならないという、わかりやすい事例にもなっている。ミツバチを取り入れる開発事業では、ミツバチを飼う側と、ミツバチを飼う環境の両方の向上が望まれることになる。環境を住民に結びつけて考えるよいプロジェクトになりやすい点で、もっと養蜂を地域開発で正しく取り入れてもらえればと思う。

さて、将来、これらの部族の中に養蜂を専業とするものが出るだろうか。答えは否定的だろう。その森に見合った生産量を超えることはできないからだが、「ミツバチ」という選択肢がまったく失われてしまうことは決してないだろう。彼らが今よりもっと文明の利点に浴した生活を始めてもなお、「ミツバチの歌」を歌って始めるハニーハンティングの伝統が息づくことこそが望まれている。今現在の見かけの豊かさではなく、樹齢何年も経た古木が与えてくれる日陰のように、一日では作り出し得ない、綿々とした流れの中で築かれている文化的な豊かさこそが、これら少数部族が失ってはならないものだろう。

(〒228-0802 相模原市上鶴間 2367-3)